

パレーシアの分析の続き。ガレノスの『魂の情念について』（pp.447-52）

- ガレノス『情念の治療について（情念論）』（2 世紀の終わり）
 - 「率直な語り」（今まで「パレーシア」と表してきたもの）とはどのようなものであるべきか、明示的に語られている要素が確認できる。
 - 「何によって治すかを知らずに治すことはけっしてできない」という原則からまず出発する。ところが、ガレノスは病気の治療ではなく、情念と誤謬の治療を論じると言う（病気は知らずとも医者のところに行けば治療できるが、情念と誤謬はそうではない）。
 - 「自己愛」と「他者」の話：「自己愛」を持っていると、自分に幻想を抱いてしまい、自分が見えなくなる（自分が自分の医者ではいられなくなる）。そうすると、自分で自分を判断することができなくなり、他人にそれをしてもらわなくてはならなくなる。自己愛のせいで、自分の情念や誤謬を治すために他者に頼る必要が絶対的に出てくる。ただし、この他の誰かは、寛大でも敵対的でもない〈他者〉に頼る必要がある。そんな他者を、どのように選んだり募ったりすればよいのか？
 - 【〈他者〉の条件：誰かの追従者ではないこと】それが確かめられたら一対一で話し、第一の質問をする。その質問は、信頼に関わる質問である：「行動において、話し方において、自分にたいして持つ情念の痕跡やしるしや証しなどに気が付かなかったか？」
 - 1) その人があなたの情念に気づいた場合
 - 治療が始まる。情念の病からの回復のためにどうすればよいのか、忠告を求めることになる。
 - 2) その人があなたの情念に特に気づかない場合
 - 質問をしつこく繰り返して、無理矢理にでも「いや、あなたには情念はない」という答え以外の答えを得るようにしなくてはならない。
 - 3) その人から非難されたが、その非難に根拠がないと感じられた場合
 - この〔指導者〕から逃げろ。ただし、「私にはそんな情念はない」などと言ってはならない。まず彼のほうが正しいかもしれないと思い直し、自覚してはいないが、彼の非難のおかげでわたしは自分をよりよく監視できる機会を与えられたことになるし、より注意深い境界を自分自身に向けることができるだろうと考えなくてはならない。
 - 4) その人からの非難が、根拠がないと感じられ、自分をより注意深く監視してみたが、やはりこの非難は正当ではないと確信を得た場合
 - その指導者に対して感謝しろ。なぜなら彼のおかげで不当さを耐え忍ぶ訓練ができるからだ。人生において絶えずそのような不当さには出会うのだから、指導者の不当さは、被指導者にとっては肯定的な試練である。
- * ガレノスの上記のような考え方は、同時代にはほぼ見られない。ただし、キリスト教の霊性においてこの要素が移し置かれ、発展させられるのが確認できる。

- ガレノス『情念論』の冒頭数ページを読んだ理由について
『情念論』からわかること 1：他者（指導者）を持たなければならない必要性は、構造的な必要性であるということ。他者なしではなにもできない。指導を受ける必要性は、一時的なものではない。人生においてしかるべ

くふるまおうと思う人はみな指導者が必要である。(という主題はキリスト教においてふたたび見出される)『情念論』からわかること2:ガレノスは医者であり、あきらかに医術の概念や観念のいくつかを魂の指導に置き換えて使っていること。しかし、ガレノスは〈他者〉(=信頼できる相手、指導者)が魂の技術者だとは一度たりとも考えていない。ということは、指導者は魂の技術者ではない。指導者に求められるのはいくつかの道徳的資質であり、その中心には2つの要素がある。

- ◆ 道徳的資質1:率直さ(パレーシア)、率直な語りという訓練。指導者が率直な語りをするかどうか試験しなければならない。*キリスト教では正反対の形象が見られる。キリスト教では、自分自身について語る者の率直さを吟味し、嘘をついていないか調べるのは指導者のほう。
- ◆ 道徳的資質2:よい人であるという証拠やしるしを示していること。すでに年をとった人とか、良い人だというしるしのある人(?)
- ◆ 道徳的資質3:指導されるほうにとって未知であること。当時の他の文献と比較してもきわめて独特な資質である。プラトンにおける魂の指導は、愛の関係に基づいていた。帝政期の作家たち(セネカ、ルキリウスなど)は、指導関係はすでに与えられた関係の中に書き込まれている。しかし、ガレノスの場合は、指導者は未知でなくてはならない。指導を受ける側とできるだけ希薄な関係を持っていないなくてはならない。

→多くの他の文献には明白に示されている、友愛という条件の割愛が起こっている。

ガレノスの場合、指導者とは魂の技術者でも友人でもなく、中立的なよそよそしい誰かである。

- ◆ 良心の指導の作業1:視線 ひとはその視線の対象、言説の対象、標的という立場に身を置くことになる。
 - ◆ 良心の指導の作業2:言説の主体 指導者はあなたを見て、観察して、なんらかの情念を持ってないか確認し、自由に話す。パレーシアに基づいて、あなたに語りかける。
- いずれも外的で中立的な一点から良心の指導の作業がなされている。

セネカにおけるパレーシアの特徴。庶民的で誇張的な雄弁の拒否。透明さと厳密さ。有用な言説の体内化。推定的な学問(pp.452-6)

- ◆ 良心の指導の作業3:指導者-被指導者との関係性や結びつきについて(セネカ書簡二九、四〇、七五)
 - セネカはフィロデモスとは異なり、リーベルタース(は、すなわちパレーシア p.453)が技術や技法ではないことは明らかである。セネカは、指導者-被指導者との本来あるべき関係や結びつきと、庶民的な雄弁としてなされる演説をはっきりと対立させている。

演説:群衆を前にしてなされる、暴力的で誇張に満ちている(集团的指導、庶民的教化)。犬儒派やストア派でもあるような演説家のこと。

指導者-被指導者との本来あるべき関係や結びつき:指導者-被指導者との個人的関係。持ちうる・持つはずの権利や豊かさの価値を説く。
 - 庶民的雄弁(演説)の機能:(1)強い情動で聴衆を驚かせ、判断に頼らせない、(2)強い情動を得るために庶民的雄弁は事物と真理との論理的な秩序には従わず、劇的要素だけで済ませ、一種の舞台をこしらえる。庶民的雄弁(=演説)は真理の関係を通過しない。情動的効果のみを生み出し、個人的に深い影響を与えることはない。
 - 一方、指し向かいの関係にある二人の個人の間に生じるような関係は、セネカによれば「こうした談話は、真理に場を譲るような演説でなくてはならない」。真理に場を譲るためには、透明でなくてはな

らない。飾ったり偽装したりしてはならない。透明であれば真理はそこを通過できる。

- ただし、同時にある種の秩序に従わなくてはならない。その秩序は、真理と連動して構成された秩序である。群衆の動きと連動する雄弁の秩序ではない。真理と連動した演説ならば、この演説は聞いている我々の奥底まで降りていくはずである（明晰さと反省的な構成のおかげである）。
- ギリシア人、ローマ人にとってリーベルタース（＝パレーシア）とは何であったか？（書簡七五）「僕は自分の言ったことはすべて感じ、感じるだけではなく、愛するということ」「われわれの弁論術の最重要事は」「感ずることを言い、言うことを感じねばならない」「会話と生活とが調和せねばならない」「私たちの言葉は喜ばせるものではなく、役に立つものでなければなりません」……

● セネカによる書簡に見られるいくつかの要素

- (1) 指導関係は、個別の対話が理想的である：通俗的な雄弁<<<個人－個人の手紙<<<個別の対話（指導関係にとって最善・理想的な形式）
- (2) セネカは弁論術という言葉に注意して使っている：弁論術という言葉、セネカは戦略的に使っている。自分がしていることをさして「弁論術」とは表現していない。弁論術の規則に根本的・包括的・全体的に従っているわけではない。
- (3) 率直な語りによる談話は、本質的に他者に向けられている：聞き手にとって有益であることを機能としている。ここで言う「有用性」とは、魂の「マネジメント」（精神、知性のためのものではなく、魂の交渉、活動、実践）においての有用性である。
- (4) ひとは聞いたことをたんに記憶のどこかにとどめることで満足してはならない。それを刻みつけ、それを必要とするような状況に置かれたときに、しかるべき方法で行動できるように刻みつけなければならない。このような試練を経てはじめて、ひとは聞かれた言葉の効果、パレーシアによって伝達される言葉の有用性を測ることができる。
- (5) 医術や公開術と統治、すなわち自己の統治や他者たちの統治との比較が不可避であり、根本的である：船を操舵すること、病気を治すこと、人間を統治すること、自分自身を統治することなどは、同じ類型に属する活動であり、合理的であると同時に不確実な活動である。

重要なのは、私が感じたことを話すことである、というよりも、見せることである。パレーシア、リーベルタースの目的は、思想の顕示、あるいは感じたことを示すことである。

リーベルタースの構造。思考の完璧な伝達および主体の言説における契約。（pp.456-8）

思想の顕示 第一の要素：純粋で単純な思考伝達であること。「伝達する」は、ラテン語の *preferre* という動詞が翻訳され、「手紙で知らせを伝える」という時に使われる。それは *paradosis*（言い伝え）であり、思考を単純かつ簡潔に伝達しなければならない。飾りは許容される最低限、透明さを保たなければならない。

思想の顕示 第二の要素：伝達される思想は、それを伝達する人の思想であることが明らかに示されなければならない。たんに「これが真理だ」ではなく、語っているこの私に対してこそ、この思考は真である。

思想の顕示 第三の要素：さらに、感じたり真だとみなしたりするだけではなく、それを愛さなくてはならない。私の人生のすべてがそれに支配されていなければならない（子どもに対するくちづけは貞潔で透明であるという意味で純粋である）この単純で純粋なくちづけにおいて私が現前しているのは、私自身の情愛に対してである。→パレーシアの概念の基本的な要素を思い出させる

自分の言説（＝談話、演説）のパレーシア（率直さ）を保証するには、自分が語ることそのものの中に語り手が現前していることが感じ取られなければならない。一種の契約をしている。この契約は指導の作業の根底にあり、その基礎であり条件である。その人は結んだ契約を保持している。パレーシアやリーベルタースの特徴は、他者に戦略的に適合する必要ではなく、語る主体すなわち言表行為の主体と振る舞いの主体の適合性である。弁論術

という手段から自由に語る権利と可能性を与えてくれる（必要があれば弁論術を使っても構わないが）。

教育と魂の教導。ギリシア・ローマ哲学とキリスト教におけるその関係と進展（pp.458-61）

● パレーシアについてフーコーが言おうとしたこと

- パレーシア（リーベルタース、率直な語り方）とは、指導者の言葉に本質的な形式である。それは規則から自由で、弁論術の手続きからも解放された自由な言葉である。その言葉は、一方では聞き手が置かれた特別な状況や機会に適応しなければならない。しかしより根本的には、その言葉を発する者にとって、その言葉は契約や紐帯としての価値を持つ。それは言表行為の主体と振る舞いの主体のあいだの契約である。
- 語る主体は契約に巻き込まれる。「私は真理を語る」と言う瞬間に、その人は言ったことをおこなうと約束し、表明した真理にひとつひとつ従っている振る舞いの主体となることを約束している。だからこそ、模範、範型のない真理の教育はありえない。

→真理を語る人自身がこの真理の模範を与えなければ真理を教えることはできない。だからこそ、個人的な関係が必要である。たとえば文通、さらには会話、人生の共有関係、生きた模範の長い連鎖が必要である。それはたんに模範があれば語られた真理が感じ取りやすくなるからではなく、模範と言説の連鎖において、契約がたえず更新される。私は真実を語る。君に語る。私が君に真実を語っていることを確認してくれるのは、実際に私が、私の振る舞いの主体として、言表行為の主体と絶対的に、完全に、全面的に同一であるという事実である。「私は君に語っていることを語るとき、この言表行為の主体なのだ。」

● パレーシアの核心

- なんらかの主体に対して、その人がそれまで持っていなかった技能や能力や知などを付与し、その結果としてそうした技能などを持つようにする（ある一連の技能を付与する）ことを機能とする真理の伝達を「教育的」関係と呼ぶならば、話しかけられる主体の存在様式を変容させることを機能とするような真理の伝達を「魂の教導的」（関係？）と呼ぶことができる。これは、主体に技能などを付与する関係ではない。

● 魂の教導の方法の歴史

- 古代ギリシア・ローマにおける魂の教導の関係＝教育的関係（真理の言説を言表するのは師のほうである）：主体の存在様式の変容にかかわることはすべて、忠告を与えるほうの問題だった。本質的には師、あるいは指導者や友人といった忠告を与えるほうの問題（真理の重要事、真実を語ることの必要性、真実を語るときに、語られた真理が効果を発揮するために従わなければならない規則など）
- キリスト教における魂の教導の関係＝（真理の言説を言表するのは導かれる人のほうである）真理とは魂を導く者に由来するのではなく、別の様態（〈啓示〉〈聖書〉〈福音書〉など）で与えられる。根本的な価値、真理や「真実の語り」の本質的な価値を持っているのは、あくまで魂を導かれる人である。魂を導いてもらうためには、自分自身についての真実の言説をみずから言表することが必要である。

→キリスト教は魂の教導と教育を分離し、導かれる魂に対してのみ、真理を語ることを求める。真理に現前している対象は、導かれる主体である。この真理（キリスト教の「告白」）は、彼の存在様式を変容させるための操作の唯一の要素ではなく、基本的な要素のひとつであるにすぎない。言表行為の主体は言表の指示対象でなければならない。一方で、ギリシア・ローマの哲学では、真実の言説に現前していなければならないのは指導者のほう。指導者は言表行為の指示対象ではなく、言表行為の主体とみずからの行為の主体の一致として現前している。